

南文研（鹿兒島国際大学附置地域総合研究所に合併）蒐集写真紹介

## 昭和の苗代川から平成の美山へ

井上和枝<sup>1)</sup>

1) 891-0197 鹿兒島市坂之上 8-34-1 鹿兒島国際大学

### はじめに

筆者は、薩摩焼の故郷である苗代川（現在日置市東市来町美山）の調査をしている過程で、偶然、1969年4月と1972年4月の2回にわたり、鹿兒島短期大学南日本文化研究所（現在鹿兒島国際大学附置地域文化研究所に合併）が苗代川総合学術調査をしていることを知った。それを教えてくださったのが、当時助手として参加した増田勝機先生である。その情報を得た後、地域総合研究所に移管されたはずである、当時蒐集した写真や資料を探していただいた。この調査に関しては、研究所紀要『南日本文化』所報の中で、調査の簡単な報告がなされ（2号・3号・5号）、1969年の調査に客員として参加したソウル大学李杜鉉教授（当時）の論文『玉山宮廟祭』（8号）が掲載されているが、調査全体の報告書は団長の泉教授の急死により未完に終わっていた<sup>1)</sup>。

その時から半世紀近くたった今日、蒐集した資料や撮影した写真は、美山の村落としての景観や生活状況、生業である陶磁器生産の変遷を如実に物語る貴重な証拠となっている。「朝鮮人」村落として400有余年の村落の歴史を持つ苗代川は、近代に入って、顕著な変化をたどった。この間の地方村落の過疎化という波は日本の地方社会に共通の現象であるが、苗代川の場合、加えてこの地域特有の歴史的状况が他地域より一層大きな変化をもたらした。その最後の段階と言える半世紀前の姿が、南文研調査団の撮影した写真に残されている。筆者はこの貴重な写真と今は現存しないものも含まれる蒐集資料を公開し、苗代川の歴史的变化を物語る資料として残して置くことの必要性を感じた。そこで、調査に参加された増田勝機先生の協力を得ながら、資料の公開のための作業に着手した。たまたまこの話を聞いた鹿兒島国際大学国際文化学部附属考古学ミュージアムの鐘ヶ江賢二学芸員が、写真の展示を企画してくださった。その紹介もかねて、2015年2月14日、かごしま県民交流センターで、「鹿兒島県民大学連携講座 鹿兒島

国際大学「知の試み」in KAGOSHIMA 『東西文化交流と鹿兒島学』の一環として、「特別公開講演会 伝統の継承と変容—苗代川薩摩焼集落の過去と現在」が実施された<sup>2)</sup>。

本稿は、考古学ミュージアムで展示する写真を概括的に紹介するが、それを理解するため、前提として「朝鮮人」村落苗代川の成立から現在に至るまでの歴史の変遷を略述し、特に、写真に切り取られた苗代川の風景が苗代川村落の歴史の中で占める意味について検討する。

写真は、ネガ・べた焼き・プリントの状態で7冊のアルバムに貼られている。べた焼きがあつて、ネガがないものや、重複などもあり、正確な点数の確認は難しいが、約500点になる。また、地域総合研究所所蔵の他、増田勝機先生が撮影した写真も62枚あり、それも提供していただいた。写真の中には苗代川の町並み・屋敷・墓地、薩摩焼窯・焼物製作の作業風景・焼きもの作品・焼きもの作家、玉山神社祭祀風景・祭祀道具・面などの奉納物や神社所有物等々の写真である。本稿では紙面の関係でその一部を示した。

### (1) 苗代川朝鮮人村落の成立

現在の美山（旧名苗代川）は、1592年から1598年にかけて行われた豊臣秀吉の朝鮮侵略戦争である壬辰・丁酉倭乱（日本では文禄・慶長の役と称する）によって、鹿兒島に連れてこられた朝鮮人が集住した村落である。当時の日本には5～6万人の朝鮮人が連行されていたが、その後日本人に同化していったのに対し、薩摩に連行された朝鮮人だけは、薩摩藩の特殊な政策のために、「日本の中の小さな朝鮮」を守り続けてきた。

両戦役において、薩摩は島津義弘父子が出陣し、壬辰倭乱では北は江原道まで攻略したが、丁酉再乱ではほとんど全羅道と慶尚道の一部で戦った。再乱での島津軍の動きは、薩摩に連行され後に苗代川村落を作る中心になった朝鮮人の元の居住地推定に示唆を与える。今まで、彼らの出身地は、陶磁技術と関連して、金海・熊川・南原・高靈・星州

表1 苗代川の変遷と人口変化

西暦	号	出来事	焼物	行政区画	戸数	人口
1592	文禄1	文禄の役(壬辰倭乱)始まる。島津義弘軍出兵。				
1597	慶長2	慶長の役(丁酉倭乱)始まる。島津義弘軍再出兵。				
1598	慶長3	豊臣秀吉が死去し、日本軍、朝鮮より撤兵。島津軍帰国。朝鮮人、申木野島平・東市来神之川・鹿兒島前之浜に上陸。合計80余人、うち43人島平上陸(男子20余人、女子供含む)				
1603	慶長8	苗代川池之平へ移住。2年後玉山宮創建。				
1604	慶長9	朝鮮神舞および踊を藩主の前で披露。参勤交代上下時の定例となる。				
1606	慶長11	この頃、苗代川朝鮮人の困窮が藩主に伝わり保護を受ける。朴平意が庄屋となる。	元屋敷窯が開窯			
1614	慶長19		この年から寛永年間にかけての頃、二代目朴平意が白土を発見する。白薩摩の製作が始まる。			
1624	寛永1	寛永年中(~1644)に神之川の朝鮮人が苗代川に移住。		伊集院地頭支配		
1625	寛永2	何氏三官庄屋役となる(2代30年)。名前拝領。				
1655	明暦1	仲氏新川、庄屋役、名前拝領。				
1666	寛文6	朝鮮人に危害を加える者はその一族までも処罰する旨の達しが、藩からなされる(市来の日本人との間でトラブル、日本人3人遠島処分)。				
1669	寛文9	高麗町より25家移す。身代銀及び移転料を与える。	星嘉人に命じて陶法教授。製陶に従事させる			
1675	延宝3	御飯屋を苗代川に移す。申真川御飯屋守に任命される。				
1676	延宝4	苗代川住民の出縁組禁止。入縁組許可。				
1685	貞享2	藩の直轄地となる。庄屋役を役人と改名し3人体制に。切米3石6斗づつ支給				
1695	元禄8	朝鮮式「姓名」への改名命令		藩直轄地		
1699	元禄12	李欣衛・李清春、屋久島一湊漂着の朝鮮人のための通事拜命。				
1704	宝永元	翌年にかけて30余家、162人笠野原に移住させる。				
1706	宝永3				162戸	749人
1709	宝永6	伊集院の御狩屋を苗代川に移す				
1714	正徳4	来迎院(天台宗寺)建立される。				
1719	享保4	苗代川の地頭を廃止し行政を全て伊集院地頭の支配下に移す。	焼き物に関しては従来通り藩の御寺院座が管理			
1721	享保6	役人3人と御飯屋守とその嫡子1人伊集院郷士格とし、朝鮮姓を氏字と認定。				
1772						1446人、男797人、女649人
1788	天明8				333戸	1357人
1844	弘化1		苗代川で錦手焼が始まる。			
1845	弘化2	苗代川に儉約令。同時に調所広郷が村田甫阿弥に困窮する苗代川の「御取教」を命じる。		伊集院地頭支配		
1851	嘉永4		藩主斉彬が苗代川を視察し、錦手焼の改良を指導する。			
1852	嘉永5					1151人、男595人、女556人
1857	安政4		12代沈壽官、藩営陶器製作所の工長となる。			
1866	慶應2	困窮のため笠野原住民の一部が萩塚に移住。				
1867	慶應3		バリ万博に朴正官の錦手花瓶が出品され絶賛される。			
1868	慶應4	苗代川小隊が組織され戊辰戦争に従軍する。				
1871	明治4		苗代川陶器会社が設立され、12代沈壽官が工長となる。			
1872	明治5	壬申戸籍実施。苗代川住民の姓はそのまま氏とされ、ほとんどの住民が平民とされる。				
1873	明治6		ウィーン万博に出品した12代沈壽官の大花瓶が絶賛される。	日置郡伊集院郷苗代川村(M4~M17)		
1875	明治8		12代沈壽官が玉光山陶器製造場(現沈壽官窯)を設立する。			
1877	明治10	西南戦争の勃発。苗代川から92名西郷軍として出兵				
1879	明治12		12代沈壽官が透かし彫りの技法を発明する。			
1880	明治13	「土籍編入之願」を提出。	12代沈壽官、東京支店を開設。			
1884	明治17	戸長区画制により苗代川内に戸長役場を置き、8か村管轄(苗代川・宮田村・神之川村・寺脇村・野田村・桑畑村・下神殿村・上神殿村)		日置郡苗代川村苗代川(M17~M21)	371	1543人、男783人、女760人
1885	明治18	再度「土籍編入之願」を提出するも不裁可となる。			336	

1889	明治 22	町村制実施により下伊集院村に編入される。村役場を苗代川に置き、初代村長に下泰治。		日置郡下伊集院村苗代川 (M22 ~ S31)		
1947	昭和 22	役場を下神殿村 1500 に移転 (一方に偏して不便)				
1956	昭和 31	町村合併促進法により旧下伊集院村から東市来町に合併され、美山となる (宮山→美山)		日置郡東市来町美山 (S22 ~ H17)	240	823 人、男 342 人、女 481 人
2005	平成 17	平成の大合併により日置市に編入。		日置市東市来町美山 (H17 ~)	230	582 人、男 271 人、女 311 人

等が比定されているが、連れてこられた朝鮮人は陶工だけではない。両班から賤民までの男女が含まれ、地域も晋州や河東が史料的に確認されている。さらに終戦後引き上げ時の島津軍の移動経路にあたる巨濟島 (唐島)・釜山なども考慮に入れる必要がある。

さて、1598 年の全軍引き揚げ時に連行された人々に関しては、各史料が、若干ずつ異なる着船地や人数および姓を記載しているが、苗代川定住時の状況から考えると、串木野島平・市来神之川・鹿兒島前之浜の 3 カ所に着船した 80 余人が妥当と思われる<sup>3)</sup>。

苗代川居住は、1598 年に串木野嶋平に着船した 43 人が、陶器を作ったり農業をして暮らしていたところ、1603 年、日本人との葛藤の末に苗代川の地にたどり着いたのに始まる。その後、一時高麗町に移されていた市来神之川着船の 10 余人や鹿兒島前之浜着船の 20 余人が高麗町先住組とともに、1663 年と 1669 年の二度にわたって移住させられた。ここに薩摩の朝鮮人村落としての苗代川が成立する。

最初に移住した一団に対しても、その後強制的に移住させた高麗町組に対しても、薩摩藩は、土地や屋敷、井戸、薪用切山、焼きもの用山林などの生活基盤を支給した。その後も薩摩藩は苗代川の朝鮮人を集団的に統制すると共に、行政面・経済面では優遇策を取った。さらに、村を挙げて焼き物を作らせ、藩の産業振興策の中に位置づけただけでなく、分村させて大隅半島笠野原や萩塚の開拓にも従事させた。

## (2) 薩摩藩の苗代川政策

薩摩藩の経済的・行政的優遇の上での集団的統制政策は、「日本の中の小朝鮮」苗代川を作り上げ、苗代川が幕末まで地域社会の異域として存続する根本的要因を作っただけでなく、明治維新後、この地域から離脱する者が後を絶たず、村落人口が激減する遠因にもなった。

薩摩藩の苗代川政策をまとめてみると、次のようになる。

①「入り縁組は御免・出し縁組禁止」と村落内結婚を強

制し、苗代川からは他所に出て行くことを禁じ、村落に入ってくる結婚のみを許可した。この政策は結果的に、「苗代川者」<sup>4)</sup> という民族的にも異なる特別の身分同士の結婚を奨励することになった。

②朝鮮式姓名の保持政策。1695 年綱貫は参勤交代で立ち寄った節に、太郎・次郎というような日本式の名前は、苗代川の習俗に合わないので、改名するようにとの命令を出した。1721 年には、御仮屋守主山、役人欣達・守碩・春勝の願い出に対し、役職を継承する嫡子一人ずつを伊集院の郷士として認め、特別に朝鮮姓を日本氏として認めた。翌年には、苗代川住民全体に「朝鮮的姓」を称することを許可した<sup>5)</sup>。しかし、朝鮮の姓は、日本の氏ではなく、名前の上につく字として認めただけである。

③朝鮮的風俗維持政策。「朝鮮的風俗」とは、結髪、衣服、踊り、歌、言語、「姓名」を指す。日常的な衣服や言語は日本居住が長くなるにつれて日本化していったようであるが、1771 年、第 8 代藩主重豪は、苗代川だけでなく笠野原も含めて、朝鮮服を着用し、普段も朝鮮語を用い、若者は節句には朝鮮式の結髪をするようにという命令を出した。

## (3) 明治期の苗代川

幕末から明治維新にかけての苗代川は、パリ万博・ウィーン万博への薩摩焼出品に始まる薩摩焼の世界的ブームの中で脚光を浴びたが、その後の経済的不振、藩からの保護の打ち切りという問題に直面した。何よりも彼等に与えられていた「朝鮮的姓」(氏ではない)は、明治になり藩政期よりはるかに日本人社会との触れ合いが増した。苗代川にとって大きな問題をもたらした。

1871 年、太政官布告第 170 号によって公布された戸籍法とその翌年から実施された壬申戸籍は、苗代川の人々に大変な衝撃を与えた。先ず、藩政時代、郷士扱いと自己認識していた彼等は壬申戸籍によりほとんどが平民に編入された<sup>6)</sup>。5 家の嫡男だけが郷士格として扱われることから

すると当然の帰結であった。士族と平民の違いが日常生活において重要な意味を持っていた鹿児島で、村落民全体が郷士扱いと認識してそれを誇りに生きてきた苗代川住民のほとんどにとっては大変な衝撃であった。

また、壬申戸籍作成時、それまで氏を持たなかった一般日本人が自由な氏を名乗るようになったのに対し、苗代川住民は「姓」をもたされていたため、壬申戸籍には朝鮮的「姓」がそのまま「氏」として登載された。藩政時代には、5家の長男以外は、「氏」と認められなかった「姓」が、明治の壬申戸籍では「氏」とされたのである。藩政時代も「壺屋の高麗人」として近隣の日本人社会から特別視された苗代川住民は、苗代川という居住地域と朝鮮的姓の「氏」化によって偏見の渦中に投げ出された<sup>7)</sup>。

新時代になって直面した問題を乗り越えるために、苗代川住民が考えた方策が、「士籍編入願」である。壬申戸籍作成後即座に県令大山綱良に調査願を出したが、これに対しては西南戦争の勃発のため返答がなかった。そのため1880(明治13)年、ほぼ全ての戸主にあたる364名が参加して「士籍編入願」を鹿児島県庁に提出した。そこには自分たちが「士籍」に入るべき理由が面々と述べられている。藩政時代に郷士として、①屋敷付与、②家婿門建立、③御切米支給、④朝鮮通事として数十家の召し立て、⑤役人・組頭・横目および竹木見廻牛馬役等の称吏、⑥次三子の出家志願者への許可などの優遇策がとられていたことが、その主な理由となっているが、内容には相当な誇張も見える。彼等は「士籍」のみ認められれば、経済的措置は望んでいないことを強調したにもかかわらず、1885(明治18)年4月、この願いは却下された。苗代川住民は、同年12月再び、339名の連署によって、「士籍編入再願書」を提出した。再願書ではさらに士分としての取り扱いの具体的な条項を付け加えている。①苗字書下し、②藩主御直御目見、③郷士同様浮免、④武術〔撃剣・弓術・砲術〕の御家師範家へ入門許可、⑤戊辰の役で鹿児島兵士外城四番隊として一小隊に編入され、禁闕を守衛などである。しかし、これも鹿児島県庁止まりで拒絶され、全村挙げての士籍編入運動はついに実らなかった。

#### (4) 苗代川の日本化と村落の衰退

1885年、二度目の「士籍編入再願書」が却下され、士籍編入への希望が打ち砕かれた後、苗代川住民は日本式氏獲得の方向に舵を切り換えた。それは苗代川という朝鮮にルーツをもつ村落を日本化することに帰結し、同時に苗代

川を捨てて、都市や海外へと移動していく人々が増加して、村落としては衰退の一路をたどった。「士籍編入再願書」が出される直前、369戸・1543人(鹿児島県地誌「日置郡3」)であったが、苗代川調査が行われた1965年には、191戸、591人(「苗代川の研究」)に落ち込んでいる。

ところで、日本式氏の獲得にはありとあらゆる方法が取られた。①養子縁組、②一家創立、③その他の方法(親族入籍・虚偽入籍・廃絶家再興)などである。村落の名称も1956年に美山と改称され、現在、朝鮮式姓を氏とする戸は全くなく、外から移住してきた人口が6割を占めるといふ(美山住民の話)。

苗代川総合学術調査は、こうした苗代川の変遷の末に、最後の朝鮮人村落としての残照を留めていた時行われ、まだかろうじて残っていた朝鮮的景観を映し出したのである。

#### (5) 朝鮮人村落の最後の姿を留める写真

##### ① 村落風景

苗代川の町並みは、藩政の時に、藩から家屋敷を支給されたため、各戸の間口がほぼ等しく、武家屋敷のような門をめぐらし、整然と連なり、その周囲にはのどかな村落風景がひろがり車の通交も少なく、焼物の土や製品を運ぶのには、馬車が使われていた。現在は空き家と廃屋が多くなり、所々に廃棄された共同窯も残っているが、町並みはきれいに整備されている。村落の景観や生活状況の一端を撮った写真は60余枚となる。

##### ② 薩摩焼き作業風景

佐太郎窯・沈寿官窯・桂木窯で使っていた道具や、当時の作業風景が撮影されている。道具の名前は朝鮮語のまま使われていた。170枚程度ある。

##### ③ 作品

沈寿官窯収蔵庫および民陶館に展示されていた作品や勝目正範氏の作品など150余枚である。

##### ④ 作家

鮫島佐太郎氏(黒物、アメリカ世界民陶展で1等入賞、薩摩焼新作発表展で県知事賞受賞、弟子を沢山受け入れて後継者養成にも尽力)、勝目正範氏(透かし彫りの名人)、林盛光氏の写真など13枚である。

##### ⑤ 玉山神社

玉山神社は、朝鮮の始祖神檀君を祀った宮と言われ、ご神体は大きな岩である。苗代川移住後、1605年ころに創建され、住民の精神的支柱になってきた。住民の寄進によって、何度か改修されたが、その状況を記した「玉山宮造営

日記」も残されている。

明治になって、玉山宮の存続のため、剣神社編入を願って許された。写真の中に残されている神社の所有物の中に、能面や日本のものが入っているのはその時に混じったと思われる。藩政時代藩主がお参りしたり、大奥からの寄進があった。

玉山神社に伝わっていた神舞歌、鶴亀歌、御神幸祝詞は朝鮮語でできている。

#### ⑥ 玉山神社祭祀

玉山神社では、毎年旧暦の8月14日に行われていた、ゴソantai(旗持ち)になるハフリを決め、ハフリは決まってから万事を慎み、祭り当日は海水で身を清めた。祭日の朝、村の女性が高麗餅をもってくるが、ハフリはコレモチ返しをして、吉凶を占う。その後お神楽があり、御神幸祝詞を述べ、夕方になると各戸をまわったと言う<sup>8)</sup>。今は行われなくなった玉山神社の祭祀が20余枚の写真に残され、大変貴重である。

李杜鉉は、玉山神社の祭りを朝鮮の部落祭に淵源を求めている。

#### ⑦ 墓地

苗代川には墓地が4箇所あるが、朝鮮人村落としての苗代川の解体を顕著に示している。これらの写真に見る限り、墓地はかなり荒廃している感じがあり、昭和30年代の村落人口の急激な減少が影響していると思われる。しかし、まだ、朝鮮式「姓」を名乗る墓碑銘やハンゲルの墓もあった。現在、4カ所の墓地は大変整備されきれいになっているが、一見するといずれも墓碑銘は日本式氏になっている。

日本人墓地と変わらない様子であるが、奥に入ると、かつての朝鮮人村落であった時を思わせる朝鮮式「姓」を記す墓も残っている。4カ所の墓地にある古墓にはいくつかの特徴がある。①大変少数であるが、家門の始祖や有力だった人の墓は名前がわかるように残されている。②朝鮮式「姓」を記す墓は、表面を削って名前を分からなくして家門の墓地の中に、または林の中に複数の姓氏の墓がまとめて置かれている。③墓地の改葬にあたり、古墓は地面の中に埋めたり、階段の礎石として使われている。

それゆえに、苗代川調査団が撮影した墓地の写真40余枚は、朝鮮人村落としての最後の姿を最も明確に切り取っていると思われ、非常に貴重な意味を持っているのである。

#### おわりに

本稿は南日本研究所の苗代川調査団が撮影した写真を紹

介する一環として、苗代川村落の形成から明治以降の日本化の進展、そして、朝鮮人村落としての解体までを略述した。朝鮮人村落苗代川は、現在の薩摩焼の郷美山と変わったが、それはある意味では、藩政期の苗代川の歴史を継承するというより、新たな町に生まれ変わろうとする営みでもあった。

南文研調査団が残した写真は、そのような生まれ変わりの渦中にあり、朝鮮人村落としての面影が消えていく時、その光芒をとらえたものと言えよう。

#### 注

- 1) 1967年6月に創設された鹿児島短期大学附属南日本文化研究所(所長 長澤和俊)は顧問として、文化人類学の泰斗である東大教授泉靖一を顧問として迎えた。長澤和俊「故泉靖一先生を悼む」(『南日本文化』4, 1971年7月)によると、1968年7月の種子島調査にソウル大学の李杜鉉教授とともに参加した泉靖一教授はその後、鹿児島短大で講演をし、終了後学長が桜島や苗代川を案内した。それが機縁となって、翌1969年の苗代川調査が実現したと言う。1972年の調査には泉教授は参加していない。
- 2) 本講演会の内容は45ページ参照。
- 3) 詳細については、拙稿「苗代川「朝鮮人」の姓氏に関する歴史的考察」(『国際文化学部論集』8-4, 鹿児島国際大学国際文化学部, 2008年1月)参照。
- 4) 「苗代川者」という表現は、笠野原に移住した人々にも使われており、特別の身分範疇である。「郷士」・「出家」・「諸在(在郷百姓)」より下で、「浦浜」・「野町」より上位に位置づけられている。「宗門手札御改人数総之事」。
- 5) 本来、姓をもっていなかった者も、この時に「創姓」した可能性が高い。
- 6) 明治15年(1882)頃の苗代川の身分別人口は、士族34名(男18,女16)、平民1509名(男765名,女744名)と圧倒的に平民が多い。村役場資料、三吉明「窯業部落の研究」、『明治学院論叢』第44号第1輯,昭和32年2月,65~66頁。
- 7) そうした偏見については、姜魏堂『秘匿 薩摩の壺屋』(晴文社,昭和54年)や、森行雄「私の苗代川一連行された末裔の証言」(『兵庫の在日朝鮮人生徒にかかわる教育と運動』,兵庫在日朝鮮人教育を考える会,1984年7月)に自身やその家族の体験として詳しく描かれている。
- 8) 前掲李杜鉉「玉山宮廟祭」(『南日本文化』8号)参照。



1. 婦人たちの絵付け風景。後方には絵付けを待つ壺・花瓶類が並ぶ。



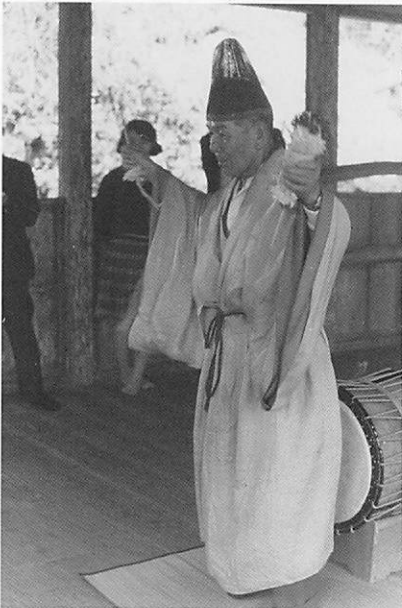
2. 陶土を運ぶ馬とソリ。当時は、車を使って荷物を運ぶことは少なかった。



3. 神官松田道康氏による高麗餅返し。旧暦の8月14日に祭事を行う。竹で編んだ平たく丸い竹アミは「バラ」と言い、その中にその年収穫した新米を入れ、ハフリ（祝人）にもたせて、返させ吉凶を占う。



4. 苗代川調査団（左から李杜鉉教授，鮫島佐太郎氏，泉靖一教授）



5. 松田道康氏の神舞姿。昼の供え物の行事に続いて、お神楽があり、鈴で調子を取りながら四方立の舞を行い、御神幸祝詞を述べる。神刀と鈴は朝鮮のムーダン（巫堂）が踊る時の必需品である。



6. ハングル印刻の墓石。1969年の調査当時、美山のハングル墓はこの一基のみ残っていたが、古老の話によると元は3基位あったという。「バンニョニ」という金名の左に「午四月二十六日」と記されているが、今は所在不明。現在沈寿官窯宅地内に、拓本から新たに作った石碑が2基保存されている。